

II. 地域総合研究センター特別調査・研究員活動報告

1. 持続可能な地域づくりを目指した住民同士のつながりづくりの取り組み

松本市地域づくりインターン第3期生 北原 保奈美

1. はじめに

1-1 研究の背景

わが国は超少子高齢人口減少社会に突入し、日本の総人口は平成20年前後をピークとして減少に転じるとともに、高齢化率は平成29年に21%（超高齢化の基準値）を超えた。このことは、特に地方における中山間地では地域の見守りや災害時の助け合い、自治活動の継続、若い世代への文化の継承などの困難といった課題をもたらしている。筆者が地域づくりインターンとして活動していた中山地区でも、高齢化率は37.4%（平成31年3月1日現在）であり、全国平均よりもかなり高い数値となっている。人口減少は顕著に現れていないものの、同地区は市街化調整区域のため人口流入が難しい地区でもあり、近い将来には更なる高齢化と人口減少が予想される。このことにより、地域コミュニティ維持の困難だけでなく、空き家や遊休農地の増加といった環境的な課題もより増えていくと考えられる。

このような課題に向き合い、いつまでも住み慣れた地域で暮らし続けるためには、既に存在しているコミュニティと地域づくり活動をつなぎ、それらが連携し合いながら地域づくりを行うことが必要になると思われる。つまり、地域全体が一体となった持続可能な地域づくりが必要になり、そのためには地域における人や資源のつながりづくりとそのつながりを広げる取り組みが必要であるといえよう。

1-2 松本市地域づくりインターンシップ戦略事業概要

前述のように、筆者は地域づくりインターンとして中山地区において活動してきた。地域づくりインターンとは、松本大学地域総合研究センター特別調査研究員として松本市内の地域づくり実践に取り組むものであり、若者が地域づくり活動に参加することで地域活動が活性化することと、若

者が地域での活動を通して成長することを支援していく事業として、平成27年度から松本市と松本大学とが協働して実施している。その具体的な内容は以下のとおりである。

1. 若者が地域課題の解決や地域の活性化など地域づくりに係わる活動に従事し、地域づくりの推進を図りながら、自らの能力の向上を図る。
2. 大学は、福祉、環境、生涯学習、観光、農業等の地域づくり・人材育成につながる専門教育を行うとともに、若者の就職、起業のための支援を行う。
3. 松本大学地域総合研究センター研究員として活動、期限は最長3年間。

（松本市ホームページより）

1-3 研究の目的

超少子高齢人口減少社会に突入したことにより、過疎の進行が深刻であり、高齢化率も高く、同時に高齢世帯の小規模化が進行している状況にある地域も少なくない。高野和良(2011)は、「高齢化率は高くとも集落での生活を継続している過疎高齢者の生活継続の要因として、まず1)農業という体力に応じて行うことのできる継続性の高い活動を持っており、それを金銭を得るためでなく、「働くこと」が生きがいといった意識で続けていることであり、2)青壮年時の青年団や消防団から婦人会や老人クラブに至るまで切れ目のない形で地域集団、年齢集団などへ参加しており、集団参加の蓄積を通じて社会的役割を維持していること、いわば参加を前提とした生活構造をもっていることである。また、かつてであれば後継世代が参加した世帯単位での道普請などの集落維持活動に、一人暮らしの女性高齢者が参加しており、このことが高い生きがい感の保持につながっているともいえる。」としている¹⁾。

高野(2011)が指摘しているように、地域の中には、さまざまな地域づくり活動団体が存在し、それらは住民同士をつなぎ、いくつもの地域課題に

取り組む中でコミュニティを維持してきた。社会が複雑化した現在では、単独主体の取り組みだけでは、課題の解決に向けて十分な効果を発揮できなくなっている。そのため、目的を共有するとともに、行政だけでなく、住民も自ら関わりながら、地域団体が連携し合い、協働し合うことが不可欠ではないだろうか。

地域にはその地域にしかない資源や、人材など重要な資源がたくさんある。既存の組織や、さまざまな地域づくり活動に加え、これまで地域の活動に関わりがなかった住民が自分たちの地域に関心を持ち、地域づくり活動に取り組むことができるよう、住民同士のつながりを更に構築できる仕掛けを作っていく必要があると考える。

そこで本研究では、中山地区でこれまで行ってきた地域づくりインターンとしての取り組みを振り返るとともに、地域資源の再発見や、住民同士のつながりの構築について実証的に検討していく。

2. 地区背景

2-1 地区の概要

中山地区の概要
人口：3,338人 男：1,607人 女：1,731人
世帯：1,366
高齢化率：37.4%
町会数：6町会
(平成31年3月1日現在)

中山地区は松本市南東部に位置し、東の鉢伏山とそれに連なる峰を隔てて入山辺地区、里山辺地区、岡谷市、西は中山丘陵、南は牛伏川を挟んで寿地区、内田地区に接している。地区の大部分は中山間地であり、西端には平成に入って造成された住宅地がある。

中山地区からはこれまで多くの土器や石器、遺跡や古墳(80基)が発見されており、約12千年前の旧石器時代の末期には当地区に人が住み、約5千年前の縄文中期には、かなり栄えていたとされている。また、室町時代には埴原城が増築され、戦国時代には小笠原氏の配下にあったとされている。明治21年、市制町村制の公布により「中山村」が成立し、昭和29年には中山村全地区が松本市と合併した。平成元年には寿地区に隣接する丘陵地に住宅団地が造成され、平成3年には「棚峯町会」となり、和泉町会、埴原北町会、埴原東町会、埴

原南町会、埴原西町会、棚峯町会の6町会による現在の中山地区となった。

主要産業は農業であるが、農業従事者の高齢化と後継者不足から遊休荒廃農地が増加している。遊休荒廃農地は、資材置き場等に転用される可能性があるため、地区内の地域活動団体が菜の花やそば栽培しており、5月には「菜の花まつり」、11月には「新そば祭り」を行っている。これらのイベントは、地区外からもたくさんの来訪者があり、毎年盛況である。

地区内には松本市中山保育園と松本市立中山小学校があり、同小学校では毎年12月に地域の方を講師として招き、しめ縄やしめ飾り、門松を作る「手作り教室」を行っており、伝統文化継承の場にもなっている。また、「中山っ子安全・安心見守りたい」を中心に、地区の園児、児童、生徒の通学時の安全確保を重点に、各町会が見守り活動を行っている。全校生徒数100名程度であるが、日々地域住民に見守られながら、地域との関わりも大事にしている。

2-2 中山地区地域づくり協議会について

中山地区では、平成26年9月10日に「中山地区地域づくり協議会」(以下、地域づくり協議会)が設立された。また、地域づくり協議会でさまざまな活動を行う中でその活動の継続性や新たな活動を行っていく上での目指すべき方向を統一、明確にするため平成28年6月に「中山地区地域づくり協議会基本計画」(以下、基本計画)を策定した。地域づくり協議会は3つの部会に分かれており、どんなに歳をとっても地域の中で、自分の役割を持ちながら暮らしていけるよう、高齢者の生きがいづくりや高齢者だけでなく子供や若者を巻き込んだ中山地区全体での元気づくりを目指す「地域活性化部会」、自分の足で行けるくらいの身近な場所で、気軽に集まり、気兼ねなく話ができる居場所づくりや、いつまでも安心して住みなれた地域で暮らしていけるように、見守り・支えあいの仕組みづくりを推進していく「福祉対策部会」、いざという時のために防災力を身につけることや、地区の景観や美観を守るために増えつつある空き家への対策等を考える「防災・環境保全対策部会」があり、どの部会も「住んで良かったと思える中山地区を目指して」を目標に掲げ、それぞれ活動をしている。

3. 実践研究

筆者は地域づくりインターンとして、平成29年度から活動を開始した。1年目は主に地域づくり協議会各部会の会議や活動に参加し、また公民館や福祉ひろばの活動に参加する中で、地域づくりの側面においていくつかの課題があるように思われた。

ひとつは、地域づくり協議会各部会の中で情報共有を図る機会が不足しており、それぞれの活動における想いや困りごとなどをみんなで話し合える場が少ないことである。地域づくり協議会として部会を超えた活動もあまりなく、横のつながりがないため部会相互の情報交換が不十分であり、それぞれの活動が共有されておらず、地域づくり協議会全体としての取り組みが把握されていない状況が見受けられた。

また、中山地区で行われているさまざまな地域づくりの取り組みが、情報として地域に効果的に発信されていないことである。各部会の活動自体が住民に知られていないという声も聞かれ、住民の方々にも地域づくりに興味を持ってもらえるように、地域の情報誌として毎月発信してはどうかという提案もあった。

さらには、近年の地域包括ケアシステムの推進を考えるなかで、その名前だけが先行し、今後の具体的な取り組みが住民の中で共有できていないことである。中山地区では地域包括ケアシステムの構築に向け、地区住民の身近な取り組みとして、高齢者の現状把握や相談対応及び傾聴を行うことを目的に町会や常会ごとのお茶のみ会を推進している。これらは地域包括ケアシステムの構築だけでなく、住民同士のつながりや、町会や常会といった小さな範囲における課題やニーズの把握、資源の発掘を通じた地域づくりにつながっていくものである。そのため、お茶のみ会の実態を調査し、今後の取り組みに向けた検討が必要になると考えられる。

2年目は、主に地域活性化部会の会議への参加やさまざまな取り組みに携わってきた。地域活性化部会の取り組みのひとつに、住民の憩いの場として週2回行われている公民館カフェがある。公民館カフェは公民館の一角を使い、有志が集まったボランティアである「カフェガール」がコーヒーを淹れてくれる誰でも立ち寄ることができるカフェ

である。しかし、住民にあまり知られておらず毎回集まるメンバーは固定されている傾向にあり、有効活用できていないように思われた。また、「カフェガール」からも年に何回かは多くの住民が集まりコーヒーを飲みながらみんなで楽しむことがしたいという声もあがっており、福祉ひろばとの連携も話題にあがっていた。

また、会議の中では中山地区にはいくつもの竹林があり、そのほとんどが手入れされておらず景観的にもよくないため何か活用できないかという意見があった。他の部会員からも竹は中山地区の資源でもあるため、資源を有効活用し中山地区を盛り上げることができないかという声や、地域の資源を活用することで更に住民同士のつながりを構築できないかという声もあった。地域資源の活用を通して、地域活性化部会だけでなく、中山地区でさまざまな地域づくり活動を行っている団体や、子どもから高齢者まで幅広い年代が関わることのできる取り組みを目指し、議論を重ねていた。

地域づくりインターンとして活動する中でみてきたこうした課題や問題をもとに、平成29年度の活動として取り組んだ、中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」、情報発信のひとつでもある地域づくりニュースの発行、高齢者の居場所づくりでもある町会や常会でのお茶のみ会を振り返るとともに、平成30年度に取り組んできた歌声喫茶、竹灯籠の実践を次に示す。

3-1 平成29年度の振り返り

(1)中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」について

先に述べた課題のうち、各部会における情報共有の不足と部会相互の情報交換が十分でないという課題を視野に入れ、これまで地域づくり協議会が取り組んできた活動を振り返るとともに、委員それぞれの思いを出し合える機会を設けることを目的としたワークショップを企画・提案した。ワークショップの実施に向けて、町会連合会長、地域づくり協議会各部会の部会長、中山地区地域づくりセンター長、公民館長、公民館主事、福祉ひろば職員、地域づくりインターンのメンバーで3回の準備会を行った²¹⁾。

準備会を重ねる中で、ワークショップでは地域づくり協議会における地域づくり活動のこれまでの活動を振り返り、その成果と課題を基本計画に

照らし合わせ、地域づくりに関わるメンバーで共有することを目的とした。また、外部有識者の考えを取り入れたいという準備会のメンバーの意見から、地域づくりを専門としている松本大学の白戸教授へ協力を依頼することとした。白戸教授から、「ワークショップ」という言葉はみんなが身構えてしまうため、最初は楽しく肩の力を抜いてできるやり方や別の言い方に変えるようアドバイスを受けた。アドバイスをもとに、参加したメンバーで自由に意見を交わし、普段抱えている思いを共有し合い、地域づくりに対して気楽に考えてもらえるような機会となることを意図し、気軽に中山について意見を出し合える場として、中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」(以下、懇談会)を開催した^{注2}。

懇談会当日は、地区で同好会として活動の幅を広げている「うたづくり同好会」や「ねこつぐら同好会」に活動を紹介してもらい、地域づくり協議会以外で展開されている地域づくり活動を知ってもらう機会を設けることとした。「うたづくり同好会」の代表者が仲間と作った「中山は山の中」という地域を意識した歌を創作しており、地域のなかにこのような歌があることを知ってもらう機会とすることと、会場の雰囲気をやかなものとするを企図し、参加者全員で合唱することを計画した。

はじめに企画していたワークショップも、参加者が気軽に参加できるよう意見交換会という名前に変え、参加者がリラックスして話ができる雰囲気づくりを意図して、農村女性協議会の会長の協力を得て、お茶と手作りのお漬物を出すこととした。総勢50名の参加があり、以前は「地域づくりは難しい」「これからの方向性をどう見出せばいいのか」と頭を抱えていた役員も、白戸教授の講演を聞き、「自分でやれることをやるのが地域づくり。なるほどなと思った。」という声や、「地域をどうするのかではなく、自分はどうするのか、したいのか。という言葉聞いて、気持ち楽になった。」という声も聞かれた。また、意見交換会では、「身近な資源を見つけることからしてみたい。」や、「子どもが少ないため、地域の大人と一緒に作業することで交流ができれば。」という声や、「野菜づくりをみんなで仲良くしながら、産業につなげたい。」など、さまざまな意見を聞くことができた。

これまで中山地区においては、地域づくり協議

会のメンバーが膝をつき合わせて意見を出し合う場が少なかったこともあり、懇談会のような場を設け、今まで口にできなかった自分の思いや考えを出し合うことや中山地区に対してのそれぞれの思いを交わすことによって、これまで以上に地区を見つめる機会となったのではないだろうか。住民が集まり、こうした意見交換会の機会を設けることで、住民がさまざまな視点から地域を捉えることが可能となり、そのことが地域の新しい発見をもたらし、今後の活動の発展にもつながるのではないかと考える。

(2)地域づくりニュースについて

地域づくり協議会は部会でさまざまな活動を行ってきたが、そうした活動があまり住民に認知されていないという声が聞かれ、それは先に述べた課題のひとつである地域づくりに関する情報発信の不足であった。そこで、広く住民に情報を発信していく媒体として地域づくりニュースを発行することとなった。最近では、公民館だよりと福祉ひろばだよりをひとつにして発行している地区が増えつつある。そうした他地区の取り組みも参考にしながら、中山地区でも公民館だよりと福祉ひろばだよりをひとつにし、なおかつそこへ地域づくりニュースも取り入れ、「ふるさと中山だより～住んでよかった中山～」として発行することとなった^{注3}。

具体的には、地域づくり協議会の各部会の広報担当者から活動の記事をあげてもらい、時に編集を加え、全ページカラー刷りのものを全戸配布することとした。カラーで見やすく、1枚でさまざまな情報を得られることや、全戸配布にしたことにより、いつでも手元に置いておける点では住民からの評価はよかった。また、地域づくりニュースには各部会のさまざまな活動の取り組みについて掲載しているため、興味を持ってくれる人や、参加者が増えつつある活動も見受けられた。中山地区の情報誌としてより一層多くの住民に活用してもらえるよう、今後は地域活動をしている側の視点や声を届けることや、地域全体を捉えた幅広い内容の紙面にする必要があらう。紙面だけでは、必ずしも住民全員が手に取るとは限らないため紙面での情報発信だけでなく、住民が集まる機会に中山地区の地域づくり活動の現状を報告するなど、自ら発信できる場を設けることも必要になると考える。そうすることによって、より身近

に地域活動をしている側の視点や声を届けることができ、住民にとっても地域活動に関心を持つきっかけにもなるのではないだろうか。

(3) 町会・常会でのお茶のみ会について

地域づくり協議会の福祉対策部会の中で、地域包括ケアシステム構築に向け、公的機関の専門職員による学習会や、各町会や常会によるお茶のみ会の充実、高齢者の見守り活動の検討を行っている。お茶のみ会に関しては、現在実施している各町会のお茶のみ会の回数を増やすことや、内容を充実させるための検討を行っている。こうした取り組みは、地域包括ケアシステムの構築に限らず、住民同士のつながりをつくり、より身近な生活圏でのニーズを掘り起こすきっかけにもなるため、地域づくり協議会が掲げる福祉の推進の取り組みとしての意図も含まれている。

各町会におけるお茶のみ会は、民生委員や町会ボランティアが主体となって開催している。内容としては、住民が集まりお茶をのみながら会話を楽しみ、時には昼食会を開くなどさまざまであるが、体操や工作、カラオケなどを取り入れているところもある。お茶のみ会に参加している住民からは、「一人で家にいると、何もしないで過ごしてしまうが、いろいろしてもらえてよかった」という声や、「近所の顔見知りの人たちだけで、気兼ねなく参加できてよかった」という声があがっている。

しかし、まだ数町会での取り組みであり、筆者もお茶のみ会に足を運びボランティアなどの運営側と情報共有をしながらお茶のみ会の内容の充実や、他町会との情報共有などを行ってきた。お茶のみ会を促進するためにも、運営側が集まり現状や課題などを情報共有できる場や、町会や常会が連携し合える仕組みをつくっていく必要があると考える。

地域住民にとって、町会や常会といった物理的に身近な場所で開催されるお茶のみ会は、気軽に足を運ぶことのできる居場所となっている。それゆえに、顔見知りが集まる場所でもあるため、お互い気兼ねせず話すことができ、自分の抱える困りごととも相談しやすいため精神的にも身近な場所となっていると考えられる。地域の困りごとや埋もれているニーズを掘り起こすために、町会や常会のような身近な範囲で、住民同士が情報を収集し、共有していくことのできるお茶のみ会のような仕組みは必要であろう。

3-2 平成30年度の取り組み

(1) 歌声喫茶

地域づくり協議会の地域活性化部会の活動のひとつに、公民館カフェがある。毎週火曜日と金曜日の午後に公民館のロビー一角を使い、有志が集まったボランティア「カフェガール」が公民館カフェを開店している。そこは、誰でも好きなときにコーヒーをのみに来られる自由な空間となっている。こうした公民館カフェに参加していく中で、おいしいコーヒーをのみながら、みんなで楽しむことができる歌声喫茶をやってみたいという声があがった。歌声喫茶は、昭和30年～40年代を中心に、喫茶店に足を運んだ客がみんなで1つの曲に合わせて歌う「みんなで歌える人気の場所」として流行していた。平成30年度に新たに着任した公民館長がギターが得意ということもあり、みんなで楽しく一緒に歌を歌うことで、参加者同士の親交を深め、住民同士のつながりをつくることを目的としてカフェガールと公民館長とで第一回目の歌声喫茶を開催することとなった。毎週行っている公民館カフェは中山地区公民館の一角を使用しているが、今回はたくさんの人に足を運んでほしいという思いもあったため、福祉ひろばを会場に歌声喫茶を開催した。福祉ひろばの職員とも協力をしながら会場づくりを行い、公民館長が歌集を作成した。また、当日は公民館長の友人もかけつけ、ギター、ウッドベース、ピアノなどの楽器の演奏とともに、たくさんの歌を歌った。カフェガールそれぞれが花を持ち寄り、各テーブルに飾ったことで、温かい雰囲気の中開催することができた。

当日の参加者数は23名で、日頃中山地区で行っている事業の参加者数に比べるとやや少ないように思えた。その原因のひとつに、福祉ひろば事業の場合は民生委員の送迎がつくが、今回民生委員に歌声喫茶の開催告知が遅くなり、送迎の対応が町会ごとばらつきが出てしまった。地域づくりニュース等での情報発信はできていたものの、送迎などの細やかなところまで考える必要があった。

参加者からは、「懐かしい歌をたくさん歌うことができて楽しかった。」という声や、「また、やってほしい。」という声も聞かれ評判はよかった。スタッフからは「カラオケみたいなものだと思うけど最初は嫌だったけど、楽器の生演奏で歌うことができてとてもよかった。」という声や、「初めてお目にかかる人もいた。」という声も聞かれた。また、反省会の中で、歌集だとどうしても下を向

いて歌うことになってしまうため、次行うときはプロジェクターに歌詞を映すことでみんなが前を向いて歌えるというアイデアや、福祉ひろば事業のひとつである「父ちゃん出番ですよ！」(男性の料理教室)において30年度の活動として「おいしいコーヒーの淹れ方講習会」があるため、その講習会に参加した男性達にコーヒーの淹れ方を実践してもらい振舞ってもらうなど、事業のコラボレーションもできたら男性にも足を運んでもらえるいい機会になるなど、スタッフ側からもこれからの取り組みに対して前向きな意見をたくさん聞くことができた。

歌声喫茶はまだ始まって間もないが、これからさまざまな人達が足を運び、ただコーヒーを飲むだけでなく、歌を歌ったり、会話を楽しむなど、住民同士がつながる場になるよう、周知の仕方や会場づくりなどの工夫が必要になってくるであろう。



写真1 歌声喫茶当日の様子



写真2 歌声喫茶当日の様子

(2) 竹灯籠まつり

中山地区には、いくつかの竹林があり、そのほとんどが手入れされていない状態である。そのま

ま放置しておく、他の樹木の健全な成長を阻害するなど景観的にもよくないことから、地域づくり協議会の地域活性化部会で竹の活用方法について何回か話し合いが行われてきた。筆者もその話し合いに参加する中で、竹を地域の資源と捉え、その活用方法を企画した。具体的には放置された竹林の整備を進めるとともに、地域づくり協議会だけでなくさまざまな人を巻き込むことによって住民同士のつながりをつくり、地域づくりの輪を広げるということも視点におき、住民参加型の竹灯籠まつりを企画・提案した。

以下、竹灯籠まつり開催までの取り組み状況、当日の様子などについて記す。

① 穂高神社「神竹灯」の見学・視察

- ・日時：平成30年6月28日(木)
- ・場所：安曇野市商工会 穂高支所
- ・視察内容
 - ・穂高神社で毎年行われている「神竹灯」で使用している竹灯籠(実物)の見学。
 - ・神竹灯の目的と経緯について。
 - ・ろうそくはどのようなものを使用しているのか。
 - ・耐用年数はどのくらいか。
 - ・10,000本もの竹灯籠の保管について。

穂高神社「神竹灯」の見学・視察は、地域活性化部会長・副部長・部会員、公民館長、公民館主事、松本大学専任講師、地域づくりインターンの8名で出向き、安曇野神竹灯実行委員会の4名の方からお話を伺った。

〈穂高神社「神竹灯」について〉

7年前から、穂高エリアの宿泊業(旅館、ホテル、ペンション)有志が発案し、経済活動の一環として行われている。

穂高神社が祀る神さまのうち、「穂高見命(ホタカミノミコト)」には姉がいたとされ、それが大分県と宮崎県にまたがる日本百名山・祖母山の神である「豊玉姫(トヨタマヒメ)」。その大分県にある竹田市では、里山保全と観光客誘致、地域活性化が三位一体となった竹灯籠の催し「竹楽(ちくらく)」が開催されている。この繋がりに着目した有志が、安曇野市でも同様の催しを立ち上げようと企画した。ただ開くだけでは必然性が薄いと見え、ストーリー性を重視し、穂高見命が竹

筒に入った手紙を豊玉姫から受け取り、「山を大切に
する人々の心を安曇野にも伝えたいと思った
のです。」などとしたためられていたのを読んで
一念発起したという設定を練り上げた。「神竹灯」
は年々来客数が伸び、県外からも訪れる人も増え
てきた。竹を3本束ねる作業は地域の就労センター
に依頼し、大分県竹田市のカボスや、安曇野市の
りんごなど、お互いの特産品を販売し合うなど、
地域間交流の促進にも繋がっており、ただイベン
トを行っているのではなく、さまざまな人や場所
とのつながりが形成されている。

穂高神社「神竹灯」の見学・視察を終えて、地
域活性化部会の会議等で視察の報告や、話し合い
を進めていくなかで、イベントとして同じレベル
のものを想定して取り組むことは難しいが、中山
地区でできる範囲でできることを楽しみながら行
うのがいいのではないかと実際に取り組んでみない
と、どのくらい大変でどのくらいの竹灯籠を制作
可能なのかかわからないため、できるだけ竹灯籠
を作ってみようという流れになった。また、竹灯
籠まつりとして単独で行うのではなく、平成30年
度中山地区文化祭前夜祭に合わせ中山小学校を会
場に開催することとなった。

竹灯籠まつりの目的としては、中山地区は豊か
な自然環境に恵まれ、北アルプスを望む景観は地
区の宝のひとつであるが、その一方で高齢化等
により手入れが進んでいない竹林も所々に見られ
る。そうした現状は地区の自然環境や景観、ある
いは防災の観点から懸念されるため、この竹を活
用していこうという動きもみられる。今回、地区
の文化祭にあわせ、地区の竹を竹灯籠として活
用することで、竹林を地域資源として再発見す
ることや地区の自然環境や景観を考える機会と
すること、また、賑わいを創出することにより
多世代による交流、住民同士の絆を深めること
を旨とした。

②竹灯籠試作

日時：平成30年7月26日(木)8:00~11:00
場所：公民館長の工房
参加者：地域活性化部会副会長・町会長1名・
公民館長・松本大学専任講師・地域づ
くりインターン

元町会長宅の庭から、4本の竹を伐採し、公民

館長の工房で竹を切る作業を行った。まず、一
本の竹を2、3メートルの長さに伐り、そこから長
さ50cm、40cm、30cmずつに切り分ける。こ
れらをひとつの束にし、1セットの灯籠とした。
当日は合計20セットの竹灯籠が制作できた。

〈検討課題〉

- ・100円ショップのキャンドルを試しに試してみ
たが、光が弱いため、いくつかのメーカーのキャ
ンドルを用意し、光り方を検証する必要がある。
- ・文化祭での竹灯籠の使い方を検討。
- ・点灯時間の検討。
- ・竹灯籠まつり開催にあたってのストーリーの考
案。
- ・竹伐採日の決定と製作日の決定。

今回は、中山地区福祉ひろばまつりで行う流
しそうめんを使用する竹の伐採作業に合わせて竹
灯籠の試作を行ったため、町会長の参加が多く竹
の伐採作業もスムーズに行うことができた。竹灯
籠づくりの伐採作業においても、力作業が主にな
るため男性の協力が必要になる。

③第1回 竹伐採・加工作業

日時：平成30年10月2日(火)13:30~17:00
場所：A宅・B宅・公民館長の工房
参加者：地域活性化部会長、地域活性化副部
会長、地域活性化部会員(5名)中山地区
公民館長、地域づくりインターン

A宅で11本の竹を伐採し、その後B宅で6本の
竹を伐採し公民館長の工房で、加工作業を行
った。50cmの竹を57本、40cmの竹を67本、
30cmの竹を68本加工した。

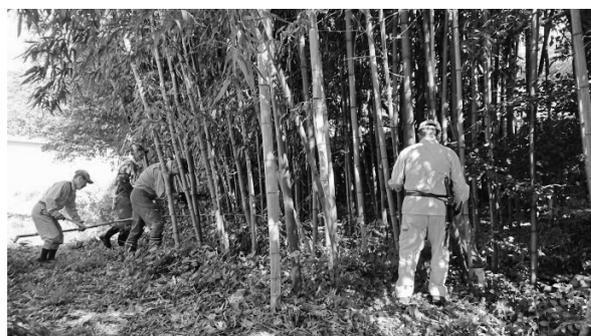


写真3 竹林で竹を伐採する様子



写真4 伐採した竹を運びやすく加工する様子

④第2回 加工作業

日時：平成30年10月11日(木)13：30～

場所：公民館長の工房

参加者：地域活性化部会長、地域活性化副部会長、地域活性化部会員(3名)公民館長、地域づくりインターン

50cmの竹を26本、40cmの竹を16本、30cmの竹を15本加工した。第1回目作業で加工した竹を合わせて、合計83組の竹灯籠を作ることができた。時間が余ったため、加工した3本の竹をPPロープでひとつに結ぶ作業を行い、21組セットすることができた。

作業終了後、当日体育館の外にどのように竹灯籠を並べるのか中山小学校に下見へ行き、実際に20本ほどの竹灯籠を並べてみた。以前、穂高神社「神竹灯」の視察へ行った際、少ない数でも竹灯籠を綺麗に見せるために段差を用いることや、間



写真5 伐採した竹を加工する様子



写真6 伐採した竹を加工する様子

隔を20cm程あけて配置することなど考慮しながら作業を行った。

その結果、当日は小学校体育館北側のトイレ入口(外)前の階段に20個ほど並べ、その他の竹灯籠は体育館入口まで灯籠の小道をつくるように並べることとした。

⑤第3回 竹灯籠製作作業

日時：平成30年10月25日(木)13：30～

場所：公民館長の工房

参加者：地域活性化部会長、地域活性化副部会長、地域活性化部会員(4名)公民館長、地域づくりインターン

50cm、40cm、30cmに加工した竹それぞれを組み合わせてPPロープでしばり、3本セットにする作業を行った。手際よく作業が進み、作業も早く終わった。竹灯籠は合計85個製作することができた。当日の竹灯籠の運搬作業は、3組セットにしたま



写真7 加工した竹をロープで結ぶ様子



写真8 3本1セットにした竹

まの状態、軽トラックに32本平積み可能のため、軽トラック3台で運搬作業をすることとなった。

⑥竹灯籠まつり当日

竹灯籠まつり当日の流れは表1の通りである。

当日は、午後2時より地域活性化部会メンバーが集まり約300本(3本1セット)を中山小学校体育館周辺に並べる作業を行った。午後4時より、小学生等の子どもたちと共に点灯式のセレモニーを行った。

表1 点灯式スケジュール

時間	内容	担当
16:00	1. 開会 あいさつ 竹灯籠製作の経緯等を簡単に説明。	地域活性化部会長
16:10	2. 点灯開始 子ども優先に、竹灯籠1セットにつき1人担当してもらう。 ※様子を見ながら大人にも一緒に入ってもらい安全に気をつける。	全員
16:15	3. 前夜祭・文化祭についてお知らせ 前夜祭の内容や、次の日の文化祭の宣伝などをする。	小岩井さん
16:30	4. 閉会 あいさつ あいさつ終了後、竹灯籠を見ていただきながら体育館へ誘導する。	地域活性化副部会長 誘導：全員

当日の参加者や、前夜祭に訪れた住民からは「幻想的でとてもきれいだった」という声や、「また来年もやってほしい」という声が聞かれた、その中には竹灯籠を目的に足を運んでくれた方もおり、初めての試みではあったが住民からの評価はよかったと感じる。しかし、竹灯籠の準備の段階から活動を進めていく中で3つの課題が見受けられた。

1つ目は、当初の目的でもあった多世代による交流や住民同士の絆を深めることができなかった点である。竹灯籠の準備作業を行う中で、小学生など地域の子も達も巻き込みながら作業を進めることを地域活性化部会の会議の中でも検討したが、初めての試みでもあったためかどのような場面で関わってもらうことができるのかイメージができなかった。準備の段階から子ども達に関わってもらうことで、子ども達が自分の住んでいる町に興味を持ってもらうきっかけにもなり、多世代の交流にもつながると考える。

2つ目は、竹灯籠の点灯時間が早かった点である。当日は16時から点灯式を始めたが、外はまだ明るく竹灯籠に点灯した際に幻想的な風景をつくることができなかった。当日の日の入り時刻が17時頃だったため、日の入り時刻に合わせて点灯式を考えていたが、文化祭実行委員会との打合せの中で、文化祭の準備終了時間から点灯式開始時間の間が空いてしまうとみんなが帰ってしまう可能性もあるため、スムーズに点灯式に入れるよう16時に点灯式を行う運びとなった。実際、まだ明るい時間に点灯したため、点灯したときの感動が薄かったように感じる。暗いときに点灯することで、竹灯籠だけの光りがより一層暗闇に映え、とても幻想的な雰囲気となる。そのような異空間を演出することによって、感動的な心に残るような印象を与え、スタッフや訪れた住民にとっても「また、やってみたい。」と思ってもらえるきっかけにもなるのではないかと考える。

3つ目は、前夜祭が早く終わってしまったため、竹灯籠の点灯時間が1時間という短い時間で終わってしまったことである。何日もかけて、地域活性化部会の部会員と準備をしてきたため、1時間で終わってしまうのは少しもったいなく感じた。竹灯籠は暗さを増せば増すほどきれいで幻想的な空間となるため、少しでも多くの住民の方に竹灯籠を楽しんでもらえるよう、文化祭実行委員会とも協力をしながら前夜祭の中身などを工夫する必

要があったのではないかと考える。

このように今回、中山地区文化祭前夜祭のひとつのイベントとして行ったが、ただのイベントで終わるのではなく、地域の資源を活用することで地域に対する新たな発見が生まれる場とすること。さまざまな年代を取り込み共に作業を行うことで、住民同士のつながりをつくるひとつのきっかけとなるように今後も継続していくことも考えていかなければならない。また、地域の子どもたちを巻き込むことで、普段何気なく暮らしていた地域に対して興味をもってもらえる機会となり、それが楽しい記憶としていつまでも残るものであればふるさとへの愛着にもつながるのではないだろうか。



写真9 竹灯籠に灯を灯す様子



写真10 竹灯籠まつりの様子

4. 考察

これまで述べてきた実践事例から、持続可能な地域づくりを目指すために地域資源の再発見や活用方法、それらの取り組みからみえてきた住民同士のつながりの構築ということと照らして考察していく。

4-1 中山地区地域づくり協議会発足3周年懇談会「今までの中山、これからの中山」

今回行ったような懇談会や意見交換会、ワークショップなどは、地域づくりの場でよく用いられている。このようなかたちが万能かと問われれば必ずしもそうではないが、みんなで考えさまざまなアイデアを出し合うことや、活動の目的を明確にし、全体で共有していくためには有意義な方法だと考える。地域のさまざまな年代が集まり、地区を語ることにより、今までみていた視点とはまた違った視点で地区をみることができる。そうすることにより地域の課題だと思っていたことも新たな資源として見出すことができるのではないかと考える。また、問題の解決と合意形成をともに進め、地域の連帯感をつくり出し、プロセスを「見える化」できることが特徴のひとつではないかと考える。このような方法は、「持続性」をもった活動を見据えて、地域での連携の担い手を育て、参加者間にネットワークをつくり出す場にもなる。集まるメンバーや人数によって語られる内容の濃さは変わってくるが、地域づくりを一体的に取り組み、地域づくりの活動を継続的かつ発展させるためには、住民それぞれの気持ちや地域におけるさまざまな情報を共有する場をつくるのが大きな意味を持つのではないだろうか。地域が一体となり、地域づくりに取り組んでいけるようになるためには、このような場をうまく活用しながら、多くの住民を巻き込み、有機的な連携によって活動を展開していくことが必要であると考えられる。

4-2 地域づくりニュース

近年、インターネットやSNSなどの普及により、若者から高齢者まで気軽に情報を得ることができる。地域づくりに取り組むうえでの情報発信を考えた場合、住民に地域の現状や課題、あるいはそれに対する具体的な取り組みを知ってもらうことにより、地域づくりへの理解や活動の輪を広

げる意味を有している。そのため、住民に向かって発信される情報は、ただ単に地域づくりの活動をPRするだけでなく、実際に活動をしている住民のリアルな声を届けるといった情報発信の手法の創意工夫により地域づくりへの意識と広がりも異なってくるであろう。最近では、地域づくりの情報発信にSNS等を使うところが多くなってきている。特に若い世代にとっては気軽に人と出会うことができ、やりとりすることができるツールのひとつでもある。しかし、気軽に人と出会える場所でもあるが、必ずしもそこから人と人がつながることができるとは限らない。コミュニティを醸成するためには、SNS等の人と出会える場も大事にしながら、実際に足を運び人と人とがつながることができるように、現地の声を取り入れるなど住民の力も必要になると考える。

中山地区で毎月発行している「ふるさと中山だより」は中山地区の住民向けのものだが、より多くの人に中山地区の魅力を知ってもらい、足を運んでもらえるきっかけとなるようにHPやSNS等のさまざまな情報ツールを使い情報を発信していくことも必要になるだろう。

4-3 町会・常会でのお茶のみ会

地域住民にとって、町会や常会といった物理的に身近な場所で開催されるお茶のみ会は、気軽に足を運ぶことのできる居場所となっている。また、顔見知りが集まる場所でもあるため、お互いに気兼ねせずに話すことができ、自分が抱える困りごとにも相談しやすいため精神的にも身近な場所となっていると考えられる。地域の困りごとや埋もれているニーズを掘り起こすために、町会や常会のような身近な範囲で、住民同士が情報を収集し、共有していくことのできるお茶のみ会のような仕組みは必要であろう。

中山地区のような中山間地は昔からの近所付き合いが根付いており、出かけたついでに近所の友人の家へ寄り、お茶をする姿も見受けられる。「向こう三軒両隣」という言葉があるように、隣近所の付き合いを更に色濃くさせるためにも、気兼ねなく集まれる場所でのお茶のみ会は支えあいの仕組みづくりを構築する方法のひとつでもあると考える。

4-4 歌声喫茶

歌声喫茶は、カラオケとは違いみんなで1つの

曲を歌うたことで一体感が生まれやすく、またカラオケが苦手な方でも気軽に足を運ぶことができる。そして、青春時代の懐かしい歌にも出会うことができるため、当時の思い出などにも浸ることができる。タイムスリップしたような雰囲気を楽しむことができる空間でもある。毎週行っている公民館カフェのように、コーヒーを飲みながら話をするのも有意義な時間となるが、そこに音楽や歌などのちょっとした仕掛けによって時間を共有することで更に住民同士の輪が広がると考える。カラオケのように一人で歌うことに抵抗があったとしても、歌声喫茶の場合はみんなで歌うことができるため、参加することに躊躇している住民も誘いやすく、参加する側も気軽に参加できるのではないだろうか。

今回、歌声喫茶を行う中で、歌をきっかけに集まった住民が町会関係なく会話が弾み分け隔てなく楽しんでいる姿が印象的であった。このように、歌声喫茶は初めて会う人であっても歌をきっかけに顔見知りになるなど、人と人とのつながりが生まれる場所でもあると考える。

現在、歌声喫茶は「カフェガール」と公民館長が主になり開催しているが、今後歌声喫茶のような地域住民が気軽に足を運ぶことができ、住民同士のつながりを深める場を地域の中でつくり続けていくためには、同じ志を持った仲間を増やす必要がある。さまざまな年代や職種が集まることで歌声喫茶だけでなく、また違った住民の居場所をつくることのできるのではないかと考える。

4-5 竹灯籠まつり

今回の竹灯籠まつりの取り組みでは、地域資源を活用することで、地域への愛着や、住民同士のつながりを構築することを目的に行ったが、小学校や地域づくり活動を行っている他団体との連携を取ることが難しく、地域活性化部会だけの活動になってしまった。原因としては中山地区にとって、竹灯籠は初めての試みということもあり、どのような作業場面で地域の子どもに関わってもらうのか検討が難しかった。また、地域づくり活動を行っている他団体との連携についても地域活性化部会の中で議論する時間が少なかったように思えた。竹灯籠まつりという1つのイベントとして開催したが、そのようなイベントを継続させていくためにはイベントという単独のものではなく、地域づくり活動とつなげていかなければならない。

実践研究でも述べたように、穂高神社で行われている「神竹灯」は経済活動の一環でもあるが、連携している大分県の竹田市との間でお互いの特産品を販売し合うなどの、地域間交流も形成しつつある。更に、「神竹灯」の取り組みは市外や県外からも注目を集め、毎年多くのボランティアも参加している。その背景には、運営側のイベントに対する目的の明確化や、運営メンバーのイベントへの想いはもちろんのこと、地域住民との想いの共有も十分にされているからこそ、地域のイベントや地域づくり活動として根付いているのではないかと考える。このように、イベントと地域づくり活動を連携して行っていくためには、地域の良さに気づき、地域をよくしたいという思いが形成されるとともに、イベントの成功体験やイベント開催のプロセスを経験すること、またイベントを通して、地域との関わりができ、同じ思いを共有できる環境を構築する必要があると考える。地域住民に、中山地区に竹という資源があることを知ってもらうだけでなく、地域資源を活用することで地域子どもたちと高齢者の世代間交流の場をつくることができ、また、さまざまな地域づくり活動を行っている団体とつながることができる、きっかけづくりや工夫が必要だと考える。そうすることで、ただのイベントではなく住民同士をつなげ地域の更なる絆を深めることができる地域づくり活動へとつながるのではないだろうか。

5. まとめ

いつまでも住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるように、持続可能な地域づくりを進めていく必要があると考える。そのためには、地域にある既存のさまざまな活動を維持しながらも、多様な人材を巻き込み、住民同士のつながりを更に構築していくことがひとつの途であろう。地域には、青年団や消防団、婦人会や老人クラブなどそれぞれの年代で構成されているコミュニティと活動があり、若年層から高齢期まで切れ目なく社会参加できる場がある。しかし、超少子高齢人口減少社会により、そういった切れ目のないコミュニティを維持していくことが困難な地域も存在している。松本市の中山間地域に位置する中山地区でも、高齢化が加速しているため将来的にコミュニティの維持が困難になる可能性も少なくないと考える。

住民同士のつながりを更に構築していくためのきっかけとして、地域の新たな資源を発掘する必要があるのではないかと考える。地域の資源は、歴史や文化、自然、人、場所などあらゆるものが資源として存在している。住民があらゆる資源を貴重な資源と再発見し、活用することができるならば、その地域独自の地域づくり活動が展開できるのではないだろうか。そのためには、地域の先住者だけでなく、地域への移住者も含めさまざまな立場の住民が集まり地域を語り、地域に触れることができる場をつくる必要があると考える。さまざまな人材が集まることで、それぞれが違う視点で地域をみることができ地域の新たな発見にもつながる。また、地域づくり活動に若者を取り込むことで、地域を捉える新たな視点や考え方がもたらされ、地域に活力が生まれることが期待される。そのような場をつくることで、住民同士のつながりも構築され、助け合える関係性も築いていくことができるのではないかと考える。既存のコミュニティを維持しつつ、更に推進していくためにも、さまざまな人材に関わりつながりを構築することが必要になるのではないかと考える。

このような視点から地域づくりインターンとして、地域資源の再発見や、住民にとって身近な場所での居場所づくりに取り組んできた。その取り組みの中で、地域の課題や問題となっていたことが多様な人材を取り込み、話し合う機会を設けることにより新たな地域資源の発見へとつながること。またそのような地域資源を活用することにより住民の居場所も形成されていくということがみえてきた。それと同時に、あらゆる年代を巻き込むためのきっかけづくりや、仕組みをつくることもこれからの課題となるのではないかと考える。

地域に存在するあらゆる資源をつなぎあわせ、住民同士が協働し合いながら地域づくり活動に取り組むことが、持続可能な地域づくりへもつながっていくのではないだろうか。

注

- 注1 北原保奈美「住民主体による持続可能な地域づくりを目指して」『地域総合研究』第19号 part1松本大学地域総合研究センター、pp.281-283(2018)
- 注2 同上 pp.284-285
- 注3 同上 p.286

文献

- 1) 高野和良「過疎高齢社会における地域集団の現状と課題」『福祉社会学研究8』福祉社会学会、pp.16-17(2011)

参考文献

- 平野真「大学教育と地域資源開発—福知山公立大学でのPBL教育事例を通じて—」『福知山公立大学研究紀要』福知山公立大学(2017)
- 田代利恵「文化的イベントが地域協働のまちづくりに果たす役割に関する研究—古い町並みを有する地方都市を事例に—」『龍谷大学大学院政策学研究』龍谷大学大学院政策学研究編集委員会(2012)
- 上野裕治「越後みしま竹あかり街道」『長岡造形大学研究紀要』長岡造形大学(2011)
- 荻野亮吾「地域の様々な主体と連携・協働を進めるポイント」『地域連携による女性活躍推進の実践—持続可能な地域づくりに活かす行政と民間のつながり—』独立行政法人国立女性教育会館編(2017)
- 田中秀幸「地域づくりのコミュニケーション研究—まちの価値を創造するために—」(2017)

6. 参考資料

資料1 「歌声喫茶高らかに 中山地区福祉ひろば 初めて」
(市民タイムス 平成30年7月13日)

歌声喫茶 高らかに 中山福祉ひろば 初めて

松本市の中山地区福祉ひろばで12日、初めての歌声喫茶が開かれた。市と松本大学(松本市新村)の協働による地域づくりインターンシップ戦略事業で、インターン生として中山地区の活動に携わる松本大学地域総合研究センター特別調査研究員の北原保奈美さん(28)が、福祉ひろばと女性有志が同地区公民館で運営する喫茶コーナー「公民館カフェ」と連携して企画した。70代を中心に地元住民約30人が訪れ、コーヒーを味わいながら、ギター歴40年の演奏に乗せて歌って楽しんだ。来場者は、鈴木館長が作った

歌集の中から「神田川」「川の流れるように」などを次々にリクエストした。鈴木館長と音楽仲間によるピアノとウッドベースの伴奏に合わせて声高らかに歌った。保高令子さん(77)は「生演奏で懐かしい歌を歌えてとてもいい。ぜひまたやってほしい」と笑顔を見せた。公民館カフェの会員らは、持ち寄った花をテーブル席に飾ってもてなした。荒井美千子会長は「地域の人々が一人でも多く地域に出てくるきっかけになれば」と話し、北原さんは「数カ月おきに継続して開いていけたら」と思い描いていた。(石川鮎美)



鈴木館長らの演奏に乗せて歌って楽しむ参加者たち

資料2 第1回竹灯籠まつり 開催要項

第1回竹灯籠まつり 開催要項

中山地区地域づくり協議会
地域活性化部会

1. 趣旨・目的
中山地区は豊かな自然環境に恵まれ、北アルプスを望む景観は地区の宝のひとつである。一方、高齢化等により手入れが進んでいない竹林も所々に見られる。そうした現状は地区の自然環境や景観、あるいは防災の観点から懸念される。そのため、この竹を活用していこうという動きもみられる。今般、地区の文化祭にあわせ、地区の竹を竹灯籠として活用することで、竹林を地域資源として再発見することや地区の自然環境や景観を考える機会とすること、また、賑わいを創出することにより多世代による交流、住民同士の絆を深めることを目指す。
2. 主催
中山地区地域づくり協議会地域活性化部会
3. 協力
中山地区文化祭実行委員会、松本市立中山小学校
4. 日時・会場
平成30年11月3日(土)16時～ 中山小学校体育館周辺
※強風・雨天の場合中止
5. 事業内容
地区内で伐採した竹を活用した竹灯籠を製作し、平成30年度文化祭前夜祭において約300本(3本1セット)の竹灯籠「光の小道(仮称)」によって地区を照らす。また、セレモニーとして地区の子どもたちによる点灯式を開催する。
6. 事前準備
(1) 竹伐採
平成30年9月29日(土) 13:30 公民館集合
※小雨決行
予備日:平成30年9月30日(日) 9:30 公民館集合
(2) 竹灯籠製作
平成30年10月25日(木) 13:30 公民館集合

(3) 当日準備
平成30年11月3日(土) 14:00 公民館集合
竹灯籠の配置・キャンドルの設置

7. 安全面について
消防とも相談をしながら、当日は消火器やバケツ等を用意する。また、ポイントごとにスタッフを配置し、安全に配慮する。

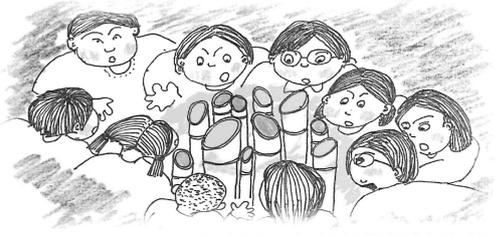
8. 点灯式スケジュール

時間	内容	担当
16:00	1. 開会 あいさつ 竹灯籠製作の経緯等を簡単に説明。	洞澤部会長
16:10	2. 点灯開始 子ども優先に、竹灯籠1セットにつき1人担当してもらう。 ※様子を見ながら大人にも一緒に入ってもらい安全に気をつける。	全員
16:15	3. 前夜祭・文化祭についてお知らせ 前夜祭の内容や、次の日の文化祭の宣伝などをする。	小岩井さん
16:30	4. 閉会 あいさつ あいさつ終了後、竹灯籠を見ていただきながら体育館へ誘導する。	高田副部会長 誘導: 全員

資料3 竹灯籠チラシ

H30年度中山地区文化祭前夜祭
竹灯籠
点灯式

どいかに志れ
しまほのを
ひふあつしちほなを
合河のよに
輝くにしよう



■11月3日(土) 16:00 ~
中山小学校体育館周辺

●主催
地域づくり協議会
地域活性化部会

●協力
中山小学校
文化祭実行委員会

●問い合わせ
58-5822
中山公民館

点灯式はどなたでも
参加できます。
灯籠に灯をともいた方は
「チャッカン」を必ずお持ち下さい。

資料4 「竹灯籠85個 幽玄な眺め 中山竹林有効活用への初の試み」

(市民タイムス 平成30年11月4日)

(27) 平成30年(2018年)11月4日 日曜日

竹灯籠85個 幽玄な眺め

中山竹林有効活用へ初の試み

松本市の中山小学校
体育館で3日、中山地
区文化祭の前日祭が行
われた。展示・ステー
ジ発表のほか、初の企
画として竹灯籠まつり
が催され、地元にある
竹林の有効活用と地域
活性化を願って住民が
手作りした竹灯籠の明
かりが来場者を和ませ
た。

中山地区地域づくり
協議会地域活性化部会
が中心となって竹の切
り出しから加工まで行
い、体育館入り口に灯
籠85個を並べた。日暮
れに合わせて点灯式も
開かれ、集まった約50
人が次々にうそそに
「地域づくりインテ
ーンシップ戦略事業」
で中山地区を担当する
北原保奈美さん(28)

地域活性化部会は数
年前から手入れが行き
届かない竹林の有効活
用を模索していた。今
回の企画は、市と松本
大学が連携して実施す
る「地域づくりインテ
ーンシップ戦略事業」
が提案した。北原さん
は「大勢が楽しめる活
くりにつなげていた
ら」と願っていた。
(荘 隆子)

を楽しんでいた。



竹灯籠の幻想的な明かりを楽しむ子供たち